Fukuoka University
MEDICAL SCIENCE
NEWS
No. 72
編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内
福岡大学医学会ニュース

アクティブ福岡大学病院を目指して

福岡大学病院 病院長　井上 亨

2015 年 12 月 1 日より福岡大学病院長を拝命した井上です。私は 2008 年に脳神経外科主任教授として福岡大学病院に赴任しました。現在まで、診療部長として手術・人材育成に没頭する傍ら、諸家のご高配により財務担当副院長、医用工学センター長を経験させていただきました。多くの諸先輩方に指導を受けながら福岡大学病院の一員としての責務を果たしてこられたことに感謝しています。新病院長として、皆様に福岡大学病院の現状と新たな取り組みについて述べたいと思います。

福岡大学病院は 1973 年 8 月 4 日に開設、地域医療の中心として社会に貢献してきました。2011 年 1 月 4 日には新診療棟がオープンし、外来部門が移転しました。地下鉄福大前駅から直結した利便性にすぐれた大学病院として皆様に貢献できていると思います。2013 年 4 月には本館の全面改装を終え、患者さんに満足していただける医療を提供できるようになりました。しかしながら、本館の老朽化は周知の事実であり早急な立て替えが必要です。厚生労働省は病院の耐震改修状況を調査公表しており、平成 26 年末までに、災害拠点病院で耐震構造を確保している病院の割合を 82%とするとしています。福岡市の主な病院が耐震構造を備えた新病院となる中で、福岡大学病院が安全性の確保されていない病院として公表されるようなことがあってはならないと思います。そのような事態を避けるために、病院の経営基盤を強化し、これまで以上に福岡大学執行部に理解と協力を御願いしていきます。

当院は、現在、ハートセンター・脳卒中センター・腫瘍センター・総合周産期母子医療センター・小児医療センター・消化器センター・認知症センターなど各診療科の垣根を越えた診療態勢でチーム医療を行っています。このチーム医療が出来るのが大学病院の最大の利点であり高度な医療を提供できる根幹です。医師・コメディカル・事務職が協力し皆で活気あるセンターを造り上げていきましょう。

また、ロボット手術・ロボットリハビリテーション・移植医療など時代を先取りした最先端の医療にも積極的に取り組んでいます。特に、最新機種のダビンチを用いた内視鏡手術は、前立腺癌などの治療成績向上が期待されています。2015 年 4 月 1 日、地下鉄福大前駅からエスカレーターで上がった新診療棟の手前にあるメディカルフィットネスセンターの中に、福岡・アジアロボティックスリサーチ＆ HAL リハビリセンターを併設しました。この施設では、スポーツ科学部と共同で、医療用・福祉用・両脚 HAL・単脚 HAL・単関節 HAL など複数の新型ロボットスーツ HAL を用いて脳卒中後遺症・脊椎脊髄疾患・脊椎損傷・パーキンソン病・神経難病など多くの患者さんの外来リハビリをおこなっています。2015 年 11 月 25 日にロボットスーツ HAL は国内で初めて医療機器として承認されました。

一方、アクティブ福岡大学病院の象徴として救命救急センターがあります。本年より、救命救急センターと総合診療部が協力して、開業医・消防隊からの紹介患者を絶対に断らない医療を行います。人口の高齢化に伴い多種多様な疾病をかかえた患者さんも多く、すべてに対応した幅広い視点で地域に優しい救急医療を提供できると思います。電話対応を円滑に行うために、トリアージナースを配置し、院内連携をスムーズに行うことでシームレスな救急体制を整えていきます。関連部署のご協力をよろしくお願いします。

2016 年 4 月には博多駅の KITTE ビルの中に、福岡大学法人事業として福岡大学博多駅国際クリニック（仮称）をオープンする予定です。福岡大学病院、福岡大学筑紫病院と同列の施設となります。国際医療、女性医師による美容形成・婦人科診療などを中心に行う予定です。まさに、九州・アジアの玄関口として福岡大学の活躍が期待されます。私たち福岡大学病院職員も福岡大学法人の運営方針に従い協力するつもりです。一方で、福岡市民の健康管理の中心を担っている福岡市医師会の方針と対立しないように、診療内容を十分に検討して運営にあたる必要があります。これからも、福岡大学病院は様々な領域で進化を遂げていきたいと思いますので、皆様のご協力を宜しくお願いします。

最後に、2015 年 10 月 1 日より医療事故調査制度が開始され、先進医療を取り巻く環境は厳しさを増していますが、その中で、地域医療の中心にある福岡大学病院が基幹病院としての使命をどのように果たしていくのか、大学病院の真価が問われる時代です。笑顔で挨拶を交わし、行動と実行を伴ったアクティブ福岡大学病院を目指します。
どうぞ宜しくお願い申し上げます。

医学部学生教育に日々、思うこと

教務委員　柳瀬 敏彦

平成25 年12 月より医学部教務委員を担当しております内分泌・糖尿病内科の柳瀬と申します。一期目の任務を終え、平成27 年12 月より、2 期目の継続任務となります。正直、この役職につくまでは、学生教育に関しては、自己流にかつそれなりに熱心な教官であったとは思いますが、教育改革や技法の話を聞く度に、どこか他人事のような感覚で眺めていたことは事実です。この役職についてみて、自己流や他人事というわけにもいかなくなり、医学教育にも様々な見方や技法があることを初めて学び、「目から鱗」の部分も多々、ありました。ただ、立派な教育カリキュラムを構築できたとしても、人間対人間のアナログ型教育が、医学教育の真髄であるという感覚は、実は今でもあまり変わっていません。私が医学生だった頃の教授の先生方は、旧制高校出身の個性豊かで人間味溢れる方が多く、単に医学者・医師というだけでなく、考古学者や文学者、音楽家といった雰囲気をも兼ね備えた先生方もおられました。医師には医学知識の修得のみならず、患者さんやスタッフを得心させる懐深い人格の滋養や人間味も大切であることを、そのような先生方から知らず知らずのうちに学んでいました。最近は、患者さんに対峙した際のコミュニケーション能力の重要性をスキルとして学ばせることが、医学教育の中でも重視されています。スキルの修得も大切なことではありますが、コミュニケーション能力は長年、培った人間力が根幹であり、学生諸君には、スマホやゲームなどに熱中するあまり青春の貴重な時間を費やしてしまうことがないよう、勉学を第一に、スポーツ、読書、旅行などを通じて、ぜひ、しっかりとした人間力を養っていただきたいと思います。福岡大学の医学生は、大変、素直で心根の優しい学生が多く、医師としての資質は申し分ありません。あとは、少しだけ自分自身で人生を切り開いていく気概と自身の未来予想図を描ける想像力が加われれば、鬼に金棒です。

現在、福岡大学医学部は分野別認証（通称、国際認証）評価の受審に向けて、教授会、教務委員会、カリキュラム検討委員会、医学教育検討委員会での議論をベースに、数年かけて段階的にカリキュラム改革に取り組んでいます。分野別認証では、医療の国際化に順応できるように、医学教育カリキュラムが分野別に一定の水準を満たしていることが求められており、全国の医学部が、現在、その対応を迫られています。朔医学部長並びに医学教育推進講座の安元教授と緊密に連携の上、低学年からの基礎科目講義の開始(H28 年度よりM1 で解剖座学、生化学)、M1, M2 よりの早期臨床医学体験の導入、H29 年度M3 よりの研究室配属（1 ヶ月）による研究体験、H29 年度M4 後半からの早期BSL 開始、高学年臨床実習時間の大幅な拡充、基礎・臨床統合型講義の導入等を実施、あるいは今後、予定しております。臨床実習の拡充は、単に時間を長くするということでなく、見学型から主体的参加という、質の向上を求められており、いまだ十分とは言えない現状ですので、今後、改善に向けた努力を継続していきたいと思います。医学部内の教育議論は百出の状況で、改革を急ぎすぎては失敗に終わる、ということを常に肝に銘じております。皆が納得できる落とし所を意識しながら、アナログ教育の良さも残しつつ、受審までには、いつの間にか、カリキュラムの理論と形が整っている、そのような改革を目指しております。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

第 42 回　医学部慰霊祭

第四十二回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十七年十月十七日（土）午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された二十五柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた二十八柱、合わせて五十三柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、朔　啓二郎医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて五十三柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

新風

平成 27 年 10 月 1 日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。

new phase

筑紫病院消化器内科
教授
植木　敏晴

平成 27 年 10 月 1 日付で松井敏幸教授の後任として 3 代目の福岡大学筑紫病院消化器内科教授・診療部長を拝命致しました。消化器内科は初代の八尾恒良教授によって創設され、その理念は松井教授に受け継がれながら、教室員は臨床・研究・教育に携わっています。私は昭和 60 年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学第一内科（奥村　恂教授）を経て、平成 4 年から福岡大学筑紫病院消化器内科（八尾恒良教授）に入局し、八尾教授と松井教授の下で、一貫して筑紫病院で診療・研究・教育に努めて来ました。専門領域は肝臓胆道膵臓で、坂口正剛先生の下で超音波検査関連手技を、学内連携で福岡大学第一外科池田靖洋教授の下で内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査関連手技を学び、主に画像診断と超音波･内視鏡下治療を行っています。地域医療に貢献できるように筑紫医師会が主催する筑紫消化器懇話会、筑紫肝胆膵懇話会などを通じて肝胆膵疾患に対する最新の知見、検査法や治療法を紹介し、地域医療支援病院として 24 時間体制で近隣の開業医や市中病院の先生方のご要望に応える体制を整えています。救急疾患である総胆管結石性胆管炎は、ほとんどの症例で内視鏡的乳頭切開術後や経皮経肝胆道鏡下に截石することで、開腹することなく低侵襲的に治療を完結しています。また筑紫病院は「地域がん診療病院」の新規申請を行っています。化学療法室室長として肝胆膵がんの診療に深く携わってきましたが、今後も緩和医療を含めて地域の先生方と一緒にがん診療に取り組んでいきます。

消化器内科の一日の平均入院患者数は約 70 人で、消化管研究室と肝胆膵研究室で半数ずつを占めています。両研究室とも他の診療科、看護部、薬剤部や栄養部などと連携し、支持療法を含めて集学的治療を行うことで、人にやさしい医療を心がけています。全ての消化器疾患をカバーできる総合消化器内科ですが、今まで通り、両研究室が緊密に連携し、消化器内科をバランス良く、さらに発展させ、魅力ある教室にしていきます。

筑紫病院は地域医療に貢献できる優秀な臨床医や福岡大学を担う若手医師を育てることが使命と考えています。私のモットーは、多子相伝です。今後も一人でも多くの消化器内科のエキスパートを育成するとともに、総合内科専門医として救急疾患や慢性疾患に対応できる人材を育てていきます。

最後に、患者さんが安心と信頼を持って受診し、検査や治療ができるように、筑紫病院のスローガンである、心の通う医療、あたたかい医療を実践していきます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

筑紫病院循環器内科
准教授
白井　和之

このたび、朔啓二郎教授・浦田秀則教授のご推挙により福岡大学筑紫病院循環器内科の准教授を拝命いたしました。

私は 1985 年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学第二内科に入局いたしました。第二内科に入ったきっかけはバレーボール部の先輩であった浦田教授に進路相談をしたことでした。研修医を終えた後は、心臓のカテーテル治療を中心に循環器疾患の診療に従事して参りました。1990 年代は冠動脈のカテーテル治療に関して新しいデバイスが次々と開発された時期であり、私も新たな治療を数多く経験することができました。2001 年から 2 年間はアメリカで心臓カテーテル治療の大規模臨床研究に携わり、帰国後は朔教授のご厚意で冠動脈解析ラボを立ち上げ、後輩とともにさまざまな臨床研究を行うことができました。

2008 年からは、いったん福岡市西区にある白十字病院に副院長として就職いたしました。ここでは、医療情勢のめまぐるしい変化に対応するため一般病院がいかに苦慮しているかを垣間みることができ、勉強になりました。

循環器疾患の診療は、急患が多いことや侵襲的な検査・治療も多いことからメディカルスタッフも含めたチーム医療が必要です。私は以前からこのことを強く感じ、チーム内の「和」を高めるように努めて参りました。

今回大学病院である福岡大学筑紫病院に復帰させていただき、私は大きなやりがいを感じています。これまでの経験を生かして、福岡大学筑紫病院の臨床と研究の発展そしてスタッフ同士の「和」を少しでも高められるように尽力したいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

生理学
講師
本田　啓

このたび、井上隆司教授の御推挙により福岡大学医学部生理学講座の講師に昇格させていただきました。私は大学院博士課程並びに日本学術振興会・特別研究員時代の 4 年間を東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻で過ごした後、米国バーモント大学医学部薬理学科で博士研究員として 6 年半過ごしました。在米中に縁あって井上隆司教授の研究のお手伝いをさせていただくことになり、その後、平成 16 年夏に日本に帰国、平成 18 年 4 月に現講座の助手着任で現在に至っております。福岡に来てほぼ 10 年、コンパクトにまとまり非常に便利な福岡の街、美味しい食事とお酒を堪能しております。

これまで私は大学院時代にトリコスタチン等の細胞周期阻害剤の作用機構の研究、在米中に cGMP の細胞内インディケーターの開発と cGMP の細胞内動態の解明の研究と、一貫して低分子化合物を介した基礎医学研究を行ってきました。最近では、cGMP 依存性キナーゼ (PKG) を中心とした cGMP − PKG 情報伝達系の解明に関する研究を行っております。PKG は古くから同定されているにも関わらず、その標的タンパク質や情報伝達機構の詳細が未だに明らかになっていない骨のある研究対象で、何かしら新しい知見を引き出そうと分子生物学的手法等を用いて研究に励んでおります。

教育では、医学科 2 年生の生理学の講義と実習の一部を担当しております。病態を正しく理解するためには健常体（生理学）を理解することが重要だという思いから、学生からは難しい、取っつきにくいと言われている生理学をいかに興味を持ってもらい、理解してもらえるかということに腐心しながら講義と実習に取り組んでおります。

これからも生理学講座の一員として学生教育や研究活動を通じて少しでも福岡大学医学部の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

病理学
講師
溝口　幹朗

私は昭和 59 年福岡大学医学部第一病理学教室に入局しました。半年後に故菊池昌弘教授の命により九州厚生年金病院（現 JCHO 九州病院）に派遣されました。当時の九州厚生年金病院は病理医が一人で、しかも病理解剖が毎年 100 例以上あり、私は主に病理解剖を担当しました。2 年後菊池教授より筑紫病院に病理部がないのでつくってこいとの命の下、単身で赴き病理部を立ち上げましたが、3 年後には九州厚生年金病院が再度一人病理医になったので行ってくれとの事で 4 年間派遣されました。平成 5 年より福岡大学筑紫病院で岩下明憲教授と共に病理診断、大学院生や研究生の指導等を 8 年間行い、七隈に戻ったのは 17 年後でした。現在は九州厚生年金病院での前立腺のラテント癌の研究が嚆矢となり、前立腺癌の研究を続けています。また長年隔週で行っている泌尿器病理カンファレンスは臨床サイドの要求や新しい技術等を教わる、私にとっても貴重な検討会となっております。微力ですがこれからも続けていける事を念願しております。

筑紫病院救急科
講師
岡村　圭祐

平成 27 年 10 月より筑紫病院救急科（循環器内科）講師を拝命しました岡村圭祐と申します。

私は佐賀県伊万里市で生まれ、中学より久留米で寮生活をして

学位取得

次の方は、平成27年9月29日付けで福岡大学より博士（医学）を授与されました。

課程修了による学位取得者

- 伊東 智宏（病態構造系）
- ファン ジェーン（病態構造系）
- 寺脇 悠一（先端医療科学系）
- 山下 兼史（先端医療科学系）
- 宮原　聡（先端医療科学系）

論文提出による学位取得者

- 廣田 貴子（呼吸器内科 助教）
- 佐藤 祐邦（筑紫病院消化器内科 助手）
- チャヤニン アントン（学外者）
- 中村 伸理子（消化器外科 講師 4 条 7 号）
- 山名 一平（消化器外科 助手）

おりましたので福岡県での生活も人生の 3 分の 2 を占めるようになりました。久留米大学附設高校を卒業後、平成 7 年に福岡大学医学部に入学。学生時代は水泳部で楽しく過ごしました。
平成 13 年に朔啓二郎先生が教授に就任されたばかりの福岡大学循環器科に入局、2 年間の研修を行い、平成 15 年に福岡大学大学院に進学しました。臨床大学院でしたので、臨床に携わりながら、朔教授、三浦伸一郎診療教授の御指導の下、脂質炎症ケモカインプロファイルと心房細動、心筋梗塞に関する研究を行い学位を所得しました。
大学院卒業後の平成 19 年より筑紫病院循環器内科にて心臓カテーテル治療を中心とした診療を行い、浦田秀則教授の御指導の下、循環器疾患でのヒト循環血中単核球キマーゼ依存アンジオテンシンⅡ活性の意義について臨床研究を行ってきました。途中、平成 21 年より 2 年間、九州医療センター循環器科救急部にて急性期医療に携わり、平成 23 年より再度、筑紫病院循環器内科（救急科）に戻りました。現在、白井和之准教授、松尾邦浩診療教授の下に、心臓カテーテル治療や救急医療に勤しんでおります。
筑紫病院は高血圧に関する臨床研究が盛んであり、最近は、難治性高血圧疾患患者を対象とした臨床研究を行っております。治療抵抗性高血圧の先端治療としての腎動脈交感神経ディナベーション治療の導入に努めてきましたが、そのスクリーニングで多くの二次性高血圧症の症例を把握することができました。以後、腎血管性高血圧症に対しての厳密な適応考察に基づく腎動脈形成術や原発性アルドステロン症の診断の為の副腎静脈サンプリング検査等を数多く行っております。この分野は意外と手薄な領域でありとても興味深くライフワークの一つとして取り組んでいます。今後は、interventionist（血管内治療医）でもある clinical hypertensionist（臨床高血圧医）として、診療と研究に貢献したいと思います。
趣味は、ダイビングです。ジンベエザメなどの大物を求めて鍛錬しています。潜水医学と循環器学は密接な関連がありますが、あまり解明されておらずこの分野でも研究ができたらと考えております。
筑紫病院は、臨床・研究ともに盛んで、スタッフ同士の連携もよく明るく元気な職場です。私も福岡大学・筑紫病院の発展に貢献できたらと思います。
今後も皆様のご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

筑紫病院脳神経外科
講師
新居　浩平

平成 27 年 10 月付けで風川清教授のご推挙により福岡大学筑紫病院脳神経外科の講師を拝命いたしました新居浩平（にいこうへい）と申します。
私は平成 13 年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学筑紫病院脳神経外科に入局しました。現在に至るまで関連の市中病院で 2 年ほど勤務した以外は研修医時代も含めて福岡大学筑紫病院で勤務しております。高知県で生まれ育ちましたが、すでに福岡で生活した期間の方が長くなりました。
当教室では脳神経外科全般の医療を行っていますが、特に脳血管障害の外科治療に力を注ぎ、その中でも‘脳血管内治療’は、他の施設よりも積極的に取り入れています。学生時代に内科系志望であった私ですが、現脳神経外科部長である風川清教授から脳血管内治療の将来の役割や展望をお聞きし、それに魅了されて門を叩いた事を今でも忘れません。その初心を貫きながら脳血管障害の外科治療に邁進し、臨床における専門医指導医を取得しました。また脳血管内治療に関する手技開発や長期成績を研究して学位を取得し、現在も国内外の学会へ発信しておりますが、今後は脳血管障害だけでなく脳腫瘍等の神経外科全般における治療や研究にも力を注いで参りたいと考えています。
私が入局した当時の福岡大学筑紫病院脳神経外科には、様々な大学出身の先輩方が国内留学していて、学閥にこだわらない自由闊達な雰囲気の中で臨床業務に従事できました。最近は福岡大学卒業の後輩が多く入局し、教室の中核を担うようになりましたが、学閥のない自由な雰囲気は維持していきたいと考えております。脳血管障害は様々な疾患と関連することが多い為、脳神経外科を志す先生だけでなく他科の専門を目指す先生方にも当科で臨床研修してもらいたいと思っております。
福岡大学筑紫病院は本年度から‘脳卒中センター’を設けて、脳卒中診療体制を更に強化することになり、私も地域医療支援病院の一員として努力精進する所存にございます。同窓会ならびに福岡大学医学会の諸先輩方には今後とも御指導、御鞭撻の程を宜しく御願い申し上げます。

祝　福岡大学医学紀要第42巻 優秀論文賞

熊谷　尚子（筑紫病院循環器内科）

「Autonomic Imbalance and QT Dynamics in Idiopathic Ventricular Fibrillation」

吉良　健太郎（精神神経科）

「The Effects of Sansoninto on the Insomnia in Socially Isolated Mice」

教室だより
Letter from a classroom

福岡大学筑紫病院
耳鼻いんこう科

部長　坂田 俊文

福岡大学筑紫病院病院の耳鼻いんこう科は 1990 年 10 月からスタートしました。最初は調　重昭教授と山崎恵三講師の 2 名でしたが、1996 年からは森園哲夫教授を含め 5 名の医師が勤務していました。2004 年 4 月からは、現福岡徳洲会病院耳鼻咽喉科部長の宮城司道医師が 3 名の若手医師を率いて活躍し、2008 年 10 月からは私を含め 4 人で診療にあたっています。私以外の人事は福岡大学耳鼻咽喉科学教室からの派遣で、経験年数 10 年前後、数年前後、そして 2 年目の医師が 1 年～ 3 年交代で勤務しています。取り扱う疾患が福岡大学病院と当院とでは異なるため、耳鼻咽喉科学の教育面ではお互いに補完しあう関係です。

当院は地域医療支援病院という性格から、主に耳鼻咽喉科開業医や他科施設からの紹介患者の診療をおこなっています。昨年度の新患数は 1310 名で、新規入院患者数は 344 名でした。入院された患者さんのうち 254 名は手術治療を目的としており、それ以外は急性炎症性疾患、突発性難聴、顔面神経麻痺、めまい疾患などに対する薬物治療を目的としていました。また、入院と外来を合わせた全ての手術数は 494 件で（保険請求ベース；1 名で複数の手術を受けられた例があります）、主なものは、耳科手術、鼻・副鼻腔手術、扁桃手術、声帯手術の他、甲状腺や耳下腺の腫瘍手術でした。当院には放射線治療設備がないので、手術治療で完結する甲状腺や耳下腺の悪性腫瘍以外は福岡大学病院、九州がんセンター、九州大学病院、久留米大学病院などにお願いしています。一方、聴覚異常感（耳鳴、聴覚過敏、耳閉感、自声強聴など）や耳管開放症については専門外来を展開しており、近隣の大学病院からも紹介を受けています。これらの豊富な臨床例を背景に、聴覚異常感やアレルギー疾患などの臨床研究にも積極的に取り組んでいます。

耳鼻咽喉科は他科との境界領域が多く、平素からいろいろな診療科にお世話になっています。今後とも福岡大学筑紫病院耳鼻いんこう科をよろしくお願い致します。

後列左から市川、梅野、ST 藤原、MT 久保田、ST 片岡、永田

福岡大学医学会第 73 回例会報告

日時：平成 28 年 2 月 23 日（火）18 時～ 19 時 15 分
場所：医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事　今福 信一

1) 開会の辞　集会幹事 今福 信一
2) 会長挨拶　医学部長 朔 啓二郎
3) 新任講演　座長…朔 啓二郎　講演 25 分，質疑応答 5 分
講演者…安永 晋一郎（生化学 教授）
「放射線と幹細胞研究」
4) 福岡大学医学紀要 42 巻優秀論文賞授与式
受賞者：熊谷 尚子（筑紫病院循環器内科）
吉良 健太郎（精神神経科）
5) 受賞論文の要旨講演　講演 10 分（質疑応答含む）
講演者…熊谷 尚子　座長…小川 正浩
「Autonomic Imbalance and QT Dynamics in Idiopathic Ventricular Fibrillation」
講演者…吉良 健太郎　座長…西村 良二
「The Effects of Sansoninto on the Insomnia in Socially Isolated Mice」
6) 閉会の辞　集会幹事 今福 信一

講演された先生方を囲んで
（左から西村先生、朔医学会会長、安永先生、吉良先生、熊谷先生、小川先生、今福先生）

教室だより
Letter from a classroom

歯科口腔外科学

教　育

当科の研修医を含む医局員は毎月開催予定の福岡大学口腔科学セミナー、半年に1度の福岡顎変形症懇談会を行っています。また、月曜日に英文抄読会、学会予行、火曜日に研究会、水曜日に症例カンファレンス、輪読会、病棟回診、金曜日に医局会、生検病理カンファレンス、病棟回診を行い、治療にあたる医局員全員の知識と認識の共有を計るよう、日々研鑽を積んでいます。加えて、医学部学生教育として、3 年生の講義を 12 コマ担当し、5,6 年生には臨床実習（BSL）を行っています。学生教育は最大限の臨床参加型として手術や症例カンファレンスに積極的に参加できるよう努めています。

研　究

研究は、顎変形症、口腔･顎･顔面外傷や骨病変の手術法、骨片固定材料やその強度の研究、歯科治療恐怖に対する患者さんの心理面の研究や脱感作療法、臨床での無痛治療法の研究、味覚に関与する因子の研究、抗血栓薬の服薬継続下での安全な抜歯、埋伏歯抜歯後の抗腫脹、抗疼痛に関する研究、セツキシマブ分子標的化マイクロバブルと超音波を併用した基礎的癌細胞殺傷効果についてなど多種多様に行っています。

診　療

現在、医局員 15 名（うち出向者 2 名）で外来・入院診療を行っています。当科はう蝕や歯周疾患を原因とする顎・顔面口腔領域の重症な感染症、難治性の口腔粘膜疾患、歯の萌出異常、咬合異常、顎変形症、歯牙脱臼、口腔領域の難組織裂創や上下顎骨骨折、口腔腫瘍、顎骨内や粘膜部位の嚢胞性疾患などを診療対象としています。口腔は三叉神経の疼痛閾値が低いために歯科治療に特化して不安・恐怖を感じる歯科治療恐怖症患者が多いため、精神鎮静法を併用した無痛治療に努めています。当科の精神鎮静法併用による全身管理下の口腔外科手術は他施設より群を抜いて多い症例数を維持しています。特に、循環器疾患患者に対する精神鎮静法併用およびモニター管理下での歯科治療の安全性は極めて高いといえます。さらに、抗血栓療法継続下での抜歯、止血管理また顎骨壊死が問題となっているビスフォスフォネート薬使用患者への対応も積極的に行っています。また、口腔常在菌による感染に注意を要する糖尿病や血液疾患などの患者に対する口腔ケアに加え、周術期口腔機能管理として臓器移植、心臓弁置換手術、脳神経外科手術や化学療法など前後の患者に対する口腔ケアを行っています。さらに救命救急センター搬入患者の顎・顔面外傷治療や重症な歯性感染症治療では、整形外科、脳神経外科、耳鼻咽喉科、形成外科や外科の担当医とともに全科的な治療に参加しています。

今後の課題と展望

当科は城南区開業の先生方とは密な連携を保てていますが、他地区の一次医療機関との連携が弱い印象があります。そこで福岡地区、北部九州地区の歯科口腔外科の診療・研究の基幹として、さらに近隣の歯科医師会、医師会の先生方と良好な連携を保つよう医局員一同で努力していきたいと考えています。

教室だより
Letter from a classroom

福岡大学筑紫病院
内視鏡部

診　療

消化器内視鏡に関する診療を、筑紫病院内視鏡部・消化器内科の総勢 42 名が担当しています。食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・肝臓・胆道・膵臓のすべての消化器疾患に対し、最新の機器を用いた最新の診断・治療を行っています。消化器内視鏡診療については、診断から治療まで完結できる九州でも数少ない施設と自負しています。近隣の筑紫地区に加えて、福岡県外からも診断や治療が困難な患者の紹介を多数受け入れています。消化管出血や急性胆管炎などの緊急内視鏡治療についても２４時間体制で対応しています。また、医師・看護師に加え臨床工学技士３名を雇用し安全で高度な内視鏡医療が確実に実践できる体制を整えています。

教　育

医学生教育については、主に臨床実習が中心です。標準的な方法から最新の手技を用いた内視鏡診療について、内視鏡検査室において、学生は医師のかたわらに立ちリアルタイムにハイビジョンモニターをみながら教育を受けています。それに加え豊富な症例を用い画像診断の教育についても力を入れています。卒後研修については、当院の内視鏡部は、日本消化器内視鏡学会・指導施設に認定され全員が内視鏡専門医を取得することができます。現在、大学院生の教育にも力を入れており、来年度は、大学院生が３名になる予定です。国内で専門医を対象とした研究会を多数主催し、海外からも多数の専門医の研修を受け入れています。

研　究

研究については、当院病理部と連携し、大学院生や多数の医局員が、熱心に内視鏡診断や治療について研究し最新の知見を積み重ねています。国内だけでなく、海外の学会でも多数発表し、国際的にも評価されています。国内や海外の研究者と共同で多施設共同研究のプロジェクトを多数立案し実行しています。福岡大学基盤研究機関である光学医療研究所も運営しており、学内の内視鏡に関する研究基盤の形成に力を注いでいます。その結果、本学の基礎研究者と共同研究を行い次々と新しい知見が発見されています。これらの研究成果を確実に論文化し英文誌に出版し、業績を積み重ねています。その結果、医学博士も毎年コンスタントに誕生しています。

メッセージ

2014 年に筑紫病院新築に伴い立派な内視鏡部が完成しました。全員が仕事をエンジョイしています。このアクティビティーを保ちつつ、内視鏡技術だけでなく心やさしい医師を育てることが目標です。

長い間
ありがとう
ございました

平成27年10月1日～平成28年2月29日までに退職された方

- ■石塚 賢治准教授（腫瘍・血液・感染症内科）　以上、10 月 31 日付け
- ■中川 尚志教授（耳鼻咽喉科学）　以上、11 月 30 日付け
- ■山本　聡准教授（筑紫病院外科）
- ■勝田 俊郎講師（脳神経外科）　以上、12 月 31 日付け